

## 甲状腺外科草子 161

### 古文復習：みだれ髪（前）

杉野 圭三

与謝野晶子の「みだれ髪」は「胭脂紫」、「蓮の花船」、「白百合」、「はたち妻」、「舞姫」、「春思」の6章、399首からなる。明治時代の詩集だが、内容は新古今和歌集などよりもはるかに難解で、もはや古典と分類すべきだろう。難しすぎるので参考書として「新潮文庫版」と「角川文庫版」を使用した。



与謝野晶子 岩波文庫 新潮文庫 角川文庫

「みだれ髪」に興味をひかれたのは、三宅香帆女史の「人生を狂わす名著 50」で依万智の「チョコレート語訳、みだれ髪」が紹介されていたからである。

岩波文庫の「与謝野晶子歌集」には自選の2900余首が掲載されたが、「みだれ髪」から選ばれたのは14首のみで世の人々を驚かせた。

その理由が類推される「あとがき」を引用する。

私が歌を作り初（原文のまま）めたのは明治三十年頃の二十歳前後からであったやうである。島崎藤村氏の新しい詩が雑誌文學界に発表され、続いて幾冊かの氏の詩集が出版され、薄田泣菫氏が新鮮な詩を多く示されたより後のことである。私は二氏に負ふ所が多いのである。また正岡子規氏に由り、短い形式の詩に勝れたものがあり、短いだけに一歩誤れば非藝術的なものになる差別を、その随筆等で教へられた。中略、後年の私を「嘘から出た眞實」であると思つて居るのであるから、この嘘の時代の作を今日も人からとやかくと云はれがちなのは迷惑至極である。教科書などに、後年の作の三十分の一もなく、また質の甚しく粗悪でしかない初期のものの中から採られた歌の多いことで私は常に悲しんで居る。以下略。

与謝野晶子自選14首は下記の通り。

その子二十櫛に流るる黒髪のおごりの春の美くしきかな

清水へ祇園をよぎる花月夜こよひ逢ふ人みな美しき

経は苦し春のゆふべを奥の院の二十五菩薩歌うけたまへ

汀（みぎわ）来る牛かひ男歌あれな秋の湖あまりさびしき

やは肌のあつき血潮に触れも見でさびしからずや道を説く君

たまくらに鬢の一すぢ切れし音を小琴とききし春の夜の夢

ほととぎす嵯峨へは一里京へ三里水の清瀧夜の明けやすき

何となく君に待たるるここちして出でし花野の夕月夜かな

ゆあみして泉を出でし我が肌に触るるは苦るし人の世の衣

春三月柱おかぬ琴に音立てぬ触れしそぞろの我が乱れ髪

かたみぞと風なつかしむ小扇の要あやふくなりけるかな

四條橋おしろい厚き舞姫の額ささやかに打つあられかな

いとせめてもゆるがままに燃えしめよかくぞ覚ゆる暮れて行く春

昨日をば千とせの前の世と思ひ御手なほ肩にありとも思ふ

有名な「くろ髪の子すぢの髪のみだれ髪かつおもひみだれおもひみだるる」も自選から削られている。

与謝野晶子に関する知識は「君死にたまふことなかれ」の作者で孫が与謝野馨官房長官というぐらいしかなかった。晶子の歌数は5万首にもおよぶとされ、浅学を恥じるばかりである。

参考資料：Wikipedia, など

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2025年12月5日